●事例紹介●

薬物依存から学生を守るために

～若者風俗と大学生～

早川　東作
（東京農工大学保健管理センター助教授）

一　はじめに

筆者は、東京農工大学が当番校として開催した大学保健の研修会の中でパネルディスカッション「学生の薬物依存」を企画したことがある（平成一一年度全国大学保健管理協会関東甲信越地方部会）。当時、アルコールとタバコを除けば大学の薬物乱用と依存の報告が皆無に等しかったのを危惧しての企画であった。一九二の大学から看護師を中心に、医師、カウンセラー、学生部長など三七六名が参加し、少なからぬ反響があった。その後、大麻と覚醒剤の乱用事例を経験した。あわせて紹介し、学生の薬物依存をめぐる問題や課題について若干の提言を試みる。

二　有名歌手の死と報道

尾崎豊の歌は、今でも広く懐かしさを持って聞かれ、また歌い継がれている。東京の護国寺で大勢のファンに囲まれて見送られた葬儀の光景やアイドル女優との恋愛挫折は大きく報道されたが、雨中、見知らぬ民家の庭で裸のままこの世を去った姿は、大量飲酒が絡んだ典型的な覚醒剤の急性中毒死にも拘わらず、覚醒剤がこの有為な青年を死に追いやったことは報道されなかったし、薬物依存の恐怖が話題になることもなかった。

・『遊び心』で大麻や覚せい剤容疑の大学生ら一六人逮

捕。××署（一九九九年五月　朝日新聞朝刊社会面）。

このような学生による薬物事犯の報道は、大学管理者にとって重大事件である。学生たちは複数大学に所属し、記事には大学の実名もあった。

先の会の企画にあたり、パネリストの朝日新聞記者中村通子氏に、大学生の薬物依存の記事を探して頂いたが、大きく扱われた大学生の記事はこれのみで、乱用から依存にいたる道筋を明確にし、危険性を訴える啓発記事は見あたらず、このように大きな見出しになることは、たいへん珍しいということだった。大学院で精神衛生学を専攻した氏も薬物関連の啓発記事は二の足を踏んで書かなかったという。逆宣伝、つまりかえって入手をそそのかす結果になるのではないか、と考えたという。しかし、教育や行政の現場は事態を深刻に受け止め、さまざまな努力を始めていることを知り、記者の認識不足だったとしきりに反省されていた。その当時には、大学保健関係者にも同じような判断があったのではないだろうか。

三　ネット上の乱用記事と「エクスタシー」

インターネット検索で採取した大学生の薬物事犯報道のリストを警察署や地域、大学名を省いて紹介する。すべて昨年と今年のものである。末尾は、話題の人気ドラッグMDMA情報である。五年前に比べ大学生の報道が明らかに増加している。

・毎日新聞が、平成一五年一月二六日より連続七回のリタリン報道。
・八月二三日夕刊で××県の大学生がリタリンの大量服用の末に自殺の記事。
・大学生薬物乱用　新たに男子学生逮捕　大麻譲り受けなどの容疑／読売新聞二〇〇四年九月。
・大学生大麻密輸事件　九州でも深刻状況／毎日新聞　二〇〇四年九月。
・覚せい剤所持で×の大学生を逮捕　大麻所持容疑でも／読売新聞二〇〇四年四月。
・大麻と免許証入った財布落とす　容疑の大学生逮捕／読売新聞　二〇〇四年四月。
・大麻所持容疑で大学生逮捕／読売新聞　二〇〇四年二月。
・大麻吸わせ女性に暴行　容疑の大学生ら二人を逮捕／毎日新聞二〇〇四年一月。
・××市・大麻所持容疑で大学生逮捕／毎日新聞　二〇〇三年一一月。
・大麻栽培容疑、大学生ら逮捕　愛知・瀬戸市内で／毎日新聞二〇〇三年九月。
・大麻草、カナダから密輸入　容疑で男女大学生を送検／読売新聞二〇〇三年六月。
・大麻密輸の疑いで、米国籍の大学生逮捕／毎日新聞二〇〇三年五月。
・「米麻薬取締局がついに、『エクスタシー』、別名『MDMA』（メチレンジオキシメタンフェタミン）の心的外傷後ストレス障害（PTSD）治療を目的とした臨床試験にゴーサインを出した。この薬の治療効果を信じる小さな団体による懸命の努力が報われたことになる」

ネットは、ドラッグの乱用をうながすような医学情報も、有害作用の研究記事も同時に眼に入る。やるかやらないか、早くやめるかやめないか、情緒不安を違法薬物で解消しようか、専門家の相談・治療を受けるべきか、このような状況にある学生にとって、相談しやすい専門相談員や精神保健科目の存在は大きいと思われる。保健・相談スタッフは、薬物（SSRIなどの治療薬も含め）の最新知識を持ち合わせていることが望ましい。そうでないと、薬物に興味をもちながら使用に迷う学生や、乱用初期、または乱用をやめたいと相談に訪れた学生に対する適切かつ有効な介入がしにくい。学生は、ストレートには告白せず、不眠やうつのクスリの相談という周辺的な相談に終始するかもしれない。それでも適切な治療に結びつく可能性はある。以下は人気のMDMA記事である。

『エクスタシー』が苦しみをもたらす Mary Ann Swissler：トロントにある中毒・精神衛生センターのスティーブン・キッシュ博士は、エクスタシーの過量摂取で死亡した二六歳のあるエクスタシー常用者と、非薬物使用者一一人の脳組織を比較した。過量摂取で死亡した人の脳では、セロトニンと呼ばれる神経伝達物質が約五〇％から八〇％も減少していたことを発見した。非薬物使用者では特に目立った減少はなかった。セロトニンは気分を調整する重要な神経伝達物質。たとえば鬱（うつ）状態にある人は通常の人よりセロトニンの量が少ないのだが、抗鬱剤はそのような状態にある人のセロトニン量を上昇させる作用がある。エクスタシーは、構造的には幻覚剤のメスカリンや興奮剤のアンフェタミンと関連がある。幸福感が高まり、他の人たちと交流したいという気持ちが強まるという。しかし、セロトニンが尽きると鬱状態が始まる。認識力のほか、記憶力を含む思考作用、痛みに対する知覚、睡眠、食欲、すべてが影響を受ける。「エクスタシー使用者が使用した翌日に鬱になったり、ふさぎ込んだりするのはこのためだと思われる」と博士は述べる。研究のために脳を解剖したジョー・スティーブンズさんの母親は、問題は「子供たちがエクスタシーを使用した週末の後、鬱状態になるということは認めるものの、それをエクスタシーと結びつけて考えないことだ」と話す。大学生では二・三％、一九歳から二八歳までの人では四・三％が過去一年間で少なくとも一回はエクスタシーを使用したことがあるという。（http://hotwired.goo.ne.jp/news/news/technology/ 多々、岩坂訳の一部を抜粋転記）

なお、このMDMAは日本で錠剤型合成麻薬とされ、一昨年一九万錠以上の押収があった（警察白書より）。

四　依存・乱用の定義と取締法

医学と司法では定義が微妙に異なる。WHO疾病分類の「精神作用物質使用による精神および行動の障害」には次のようなものがある。①急性中毒：幻覚や飲酒直後の突然の暴力、昏睡、けいれんなどの合併症や社会的引きこもりも生じる。②有害な使用：肝炎や、大量飲酒後の抑うつ状

態など身体または精神の障害がある。一般の乱用は、社会的常識から逸脱した目的又は方法で薬物を使用することをさし、本質的に司法と取締機関が関与する。また防止教育と共に取締りの強化が必要となる。多くは、他の乱用・依存者からの誘いで始めているからである。③依存症候群：使用への強い渇望、コントロールすることの困難さ、有害な結果が見込まれても使用に固執する、他の活動や義務より薬物使用に価値を見いだす、耐性の増加、身体離脱症状が典型。その他、離脱状態、幻覚・妄想、激しい興奮、恍惚などの精神病性障害、健忘症候群、フラッシュバックや人格障害などの残遺・遅発性障害、がある。

使用薬物は、アルコール、アヘン類、大麻類、鎮静剤・睡眠剤、コカイン、カフェインなど精神刺激剤、幻覚剤、タバコ、揮発性溶剤、多剤、に分類されている（「ICD-10精神および行動の障害」、一九九二）。

国内の乱用取締りの法律には、（Ⅰ）毒物及び劇物取締法（Ⅱ）覚醒剤取締法、（Ⅲ）大麻取締法、（Ⅳ）麻薬及び向精神薬取締法、の四つがある。

五　大学生の薬物乱用の実態

大学生（ただし、一八、一九歳未満の少年）の特定薬物乱用（「濫用」）による年間検挙者総数三七人は、中学生三三八人・高校生六〇九人、学校に在籍しない少年二、九六〇人に比べてかなり少ない。ちなみに、平成一四年の覚せい剤事犯検挙者は一六、九六四人であった（表）。

六　乱用防止教育と学生相談

一九八六～二〇〇三年度までに、筆者が予備校と大学で相談を行った学生は、およそ一、四〇〇人であったが、薬物依存は、わずかに三例、乱用は一件（二例）ときわめて少ない。それでも筆者は七、八年前より新入生配布の健康情報パンフレットや保健授業の中で、薬物の乱用・依存の問題を盛り込んできたが、そうすると、相談に訪れる学生が不眠や情緒問題の訴えに絡めてドラッグや精神安定剤の知識を求めてくるようになった。告白こそしないが、学内カウンセリングを利用して薬物乱用を自ら

表　少年の違法薬物乱用の実態

法令／学識	総数（人）	小計（学生・生徒）	中学生	高校生	大学生	その他の学生	有職少年	無職少年
総数（人）〈薬物関連〉	4,033	1,073	338	609	37	89	1,070	1,890
毒物及び劇物取締法	3,286	925	317	529	15	64	866	1,495
覚せい剤取締法	524	67	16	36	6	9	139	318
大麻取締法	185	70	3	38	15	14	58	57

（出典：警察庁生活安全局少年課「平成15年中の少年の補導及び保護の概況」より早川が作成）

思いとどめようとしていると感じられることはある。大学生の薬物乱用は静かに潜行、蔓延している可能性大であると考え、事例がなくても薬物乱用・依存の防止のための啓蒙教育に取り組むべきであろう。

【事例一：アルコール依存】

人前で読まされると声が震えるため語学授業に出席できず留年、飲酒して出席することを覚え、日中校内で酩酊し、倒れていたところを保健管理センターに運ばれ、看護師に勧められてカウンセリングにつながった。早期にアルコール依存を脱したが、言語治療士による高額の自費治療を受けたり、宗教がかった話し方講座に初回二〇万円も支払ったりしながらも、卒業まで大学のカウンセリングを続け、最終的にはすべての面接試験に合格して就職した。カラオケで学友との交流が可能となり、声も震えなくなったと語った。歌い続けてないと不安でマイクを独占していたともいう。依存対象が変わったわけだが、これは薬物依存治療の要でもある。

筆者が大学に赴任した頃は、コンピュータゲームに「はまり」、三年も留年したゲーム依存症が多かった。今はネット依存や依存症的なリストカット症候群に取って代わったようにも思える。

【事例二：ゲーム依存】

完全引きこもり状態を三年、しまいには近所の犬の鳴き声が飼い主の自分への嫌がらせに聞こえたり、下校時の女子生徒たちの笑い声が自分を馬鹿にしていると思えたりするようになった。「頭が変になった」と自覚し来談した。抗精神病薬の服用を強く勧めたが拒否し、登校を完全に再開、カウンセリングを受けながら八年かけて学部を卒業した。雇主にその根性を認められて就職。以来年賀状のやりとりをしているが、消退した妄想様観念は再発していないようだ。

次に、大麻種子持ち込み、栽培疑惑と覚醒剤急性中毒例を紹介する。

【事例三：大麻乱用】

アジアに旅行し、研究心から自室で栽培しようと大麻種子を持ち込み、寮で栽培し始めたところを発見され通報された。学生二人は、事の重大さにおののき、いたく反省したが、不安抑うつ状態に陥り、学内関係者で協議の結果、司法判断を待つ間に自宅謹慎、指導教員への定期報告（日記と面談）をしながら保健管理センターのカウンセリングを受けることになった。この間、学生課を介して警察署と大学がよく連絡連係していたように思う。カウンセラーにも初期の頃より関係者から意見を求められた。大学での最

終処分は司法判断待ちとなり、一方、数回の相談で情緒面は漸次回復していった。

【事例四：覚醒剤乱用・中毒】

盛り場で覚醒剤を外国人から入手。使用したところ、ヤクザに追われるとの迫害妄想を抱き、不安にかられて交番に駆け込み発覚（初犯）。大学はただちに退学処分を下した。保健管理センターが事態を知ったのは退学後であった。カウンセリングを受けたことはなかった。

時間をかけた柔らかな対応とすばやく硬い対応は対照的である。いずれにせよ、大学管理者は学内の精神保健／相談担当者の意見を求めるという発想を持ち、何が教育的であるかを十分検討協議して対応することが望まれる。

七　おわりに

以下の症例は、学生時代の薬物使用が成人になってから重篤な薬物依存症に発展する入り口になった典型例である。先の研修会でお招きした先輩医師の小宮山徳太郎氏（国立精神・神経センター武蔵病院薬物依存病棟）が提示された症例を要約してここに拝借し、本稿の結びとしたい。いずれも大学時代に依存症を見過ごされていたものである。

【症例Ａ：ブロン主剤の依存】

「学生時代、缶ビールをハンカチに包んで隠し持って構内で飲んでいたという。缶ビール五〇〇mlを一日四本。すでにアルコール依存症であった可能性がある。そのころ、軽音楽部の先輩からブロンを教えられ、飲用したところ大変良い気分を体験した。就職、結婚後に高額のブロンを購入するためサラ金に数百万円の借金をこしらえた。学内で飲酒していたことを見過ごされていたのも問題として残る」

【症例Ｂ：多剤依存】

「大学卒業後に会社勤めをしていたが情緒不安定で不安、抑鬱に幻覚症状が加わり、精神科クリニックを受診し、鬱病とされた。服毒自殺などを試み、初めて薬物使用の事実を家族が気付いたという。高校時代にライブハウスに友人と出掛け、そこでマリファナ吸煙を体験し、大学に入ってからは、スナックでアルバイトしながら薬物仲間の輪を広げ、マリファナに加えて、覚醒剤、ＬＳＤ、コカイン、ヘロイン、エクスタシーなどを使用している。問題が表面化したのは大学卒業後であったが、留年の事情を確かめることがきちんとされていたら、その時点で薬物問題が把握され薬物依存症に発展しなかったように思える」